

## ヴィゴツキー理論の発展とその時期区分について（Ⅳ）

神 谷 栄 司

### Abstract

Analyzing the Vygotskian manuscript “The Concrete Psychology of the Human Being”, this paper aims to clarify three problems: 1) how Vygotsky psychologically understood Karl Marx's “The Sixth Thesis Concerning Feuerbach”, 2) what differences existed between the conceptions of “drama” of the French philosopher George Politzer and Vygotsky, and 3) what was the linking point among Vygotskian theories of mediated development and of personality development? Through these studies, we developed a new scheme concerning Vygotskian personality theory, which clarifies not only the developmental law of general personality but the approach to the personality of each concrete individual.

**Key Words:** Vygotsky, Politzer, drama, psychological systems, emotional experience

人間の本質は、個々の個人に内在するいかなる抽象体でもない。それは、その現実性においては、社会的諸関係のアンサンブル〔総体〕である。

マルクス「フォイエルバッハに関する第6テーゼ」1845年  
諸機能の、恒常的で固定したヒエラルヒーは存在しない。

ヴィゴツキー「人間の具体心理学」1929年  
私の文化的発達歴史は、具体心理学の抽象的研究である。

ヴィゴツキー「人間の具体心理学」1929年

### Ⅳ 「人間の具体心理学」の考察——人格発達理論の新展開

前号をはじめいくつかの小論で明示してきたように、30年代のヴィゴツキー理論の基本的骨格は、①記号（内的言語）による媒介的発達理論、②年齢期、構造、心理的新形成物、危機、発達の社会的状況などの諸概念にもとづく人格発達理論、③心身の統一性を基礎にした情動理論と「人間の心理学」の構想、という三つの道が同時平行的に敷設されているが、まだ一つ

の大通りへと合流していない点に特徴がある, という仮説を提起してきた (神谷栄司, 2006, 2007 a, 2007 b, 2007 c)。

この小論では, 上記の第 1, 第 2 の道が本格的に開拓されていくうえで, エポック・メイキングな著作といえる「人間の具体心理学」(Выготский, Л. С., 1929/2003) を少々詳しく考察することにしたい。分析の主な課題となるものは, カール・マルクス (1818～83 年) の「フォイエルバッハに関する第 6 テーゼ」(1845 年) の心理学的解釈, ジョルジュ・ポリツェル (1903～1942 年) とヴィゴツキー (1896～1934 年) の「ドラマ」概念の異同, 媒介的発達理論と人格発達理論の結節点, の三つである。

## 1 ヴィゴツキー「人間の具体心理学」に関する先行研究

ヴィゴツキー (1896～1934 年) が 1929 年に執筆したと推定される草稿「人間の具体心理学」は, ロシア (旧ソヴィエト) でようやく 86 年に公表されたものであり, 内容的には, 草稿執筆の直後に書かれた『高次心理機能の発達史』(Выготский, Л. С., 1931/1983//2005) の基本的な理念 (つまり媒介的発達理論) がメモの形で書き綴られた部分と, ポリツェルの『心理学の基礎への批判』(Politzer, G., 1928/2003//2002) で提唱された「具体心理学」に刺激を受けたヴィゴツキー自身の「ドラマ」概念がこれもメモの形で記された部分とに, 分かれている。

この「人間の具体心理学」に関するわが国の先行研究 (おそらく唯一の研究) として挙げられるものは, 中村和夫の『ヴィゴツキーの発達論——文化—歴史的理論の形成と展開』第 6 章『「人間の具体的心理学」の構想について』(中村和夫, 1998) である。この論考は, 「人間の具体心理学」公表からほぼ 10 年のあいだに, ヴィゴツキーの草稿はもちろんのこと, ポリツェルの『心理学の基礎への批判』英語版, ロシアでの研究, わが国でのポリツェル研究の成果を渉猟し, ヴィゴツキーがポリツェルから摂取した具体心理学やドラマの概念は『思考と言語』(Выготский, Л. С., 1934/1982//2001) で展開された内言理論によって再構成しようという仮説を提起するなど, きわめて水準の高い先駆的なものである。

小論の課題とかかわって中村の論考のなかで注目したい論点は, 以下の 3 点である。

第 1 は, ポリツェルが『心理学の基礎への批判』を刊行した 1928 年には, 彼はまだマルクス主義者ではなく, したがってこの著作もマルクス主義的とはいえない, という点にある。

この点は, フランスはともかく, ロシアやアメリカの研究では見逃されている事柄であり, 中村の指摘はきわめて貴重である<sup>(1)</sup>。なお, 中村の指摘を補足すれば, ポリツェルがマルクス主義へ移行するのは, 寺内礼 (寺内礼, 2002) ならびにリュシアン・セーヴ (1926 年～) によれば 1929 年のことと考えられる (Sève, L., 1969/1981//1978)。前者は「ポリツェルの 1929 年の変貌」(寺内礼, 2002, p.313) と述べ, 後者は『具体心理学評論』誌第 2 号 (1929 年 7 月) に掲載されたポリツェルの諸論考 (「編者のことば」「具体心理学はどこへ行くのか」) に注目している。

第 2 は, 『心理学の基礎への批判』の心理学観と思想的基盤を明らかにしている点にある。

すなわち、ヴント以来の従来の心理学は、内観心理学であれ、生理学的な客観心理学であれ、抽象化による「心理学的実在論 (le réalisme psychologique)」と特徴づけられ、類としての心理または心理諸機能は課題とするものの、具体的個人の心理を見落としている。つまり、それは抽象心理学、三人称の心理学、メタ心理学なのである。ポリツェルはそれに対置される心理学を具体心理学、一人称の心理学、真の心理学、そしてドラマの心理学と規定している。

さらに『心理学の基礎への批判』の思想的基盤として重視されるのはフロイトの精神分析学である。ポリツェルは当時の心理学諸理論のなかで、精神分析学のみが具体的個人の心理を対象にし、それに接近していることを評価するのである。しかし、精神分析学も抽象化への傾向をもつ限りでは抽象心理学のなかに数え上げられるのであり、必ずしも精神分析学が全体として受け容れられているわけではない。

中村の指摘に若干の補足を行うなら、ポリツェルの具体心理学のオリジナルな点は、「あのまたはこの」個人、つまり、具体的個人の心理こそ心理学の唯一の対象であり、具体的個人の具体的生活である「ドラマこそ心理学の**本来の**客体」(Politzer, G., 1928/2003, p.256//2002, p.286)であるという、心理学の対象規定にある。ただ、ポリツェルはまだそれにアプローチする固有の研究方法を明らかにする点では弱さをもっていた。彼がそうした研究方法として挙げるものは、具体的には、「物語の方法」(Politzer, G., 1928/2003, p.252//2002, p.281)のみであった<sup>(2)</sup>。

第3は、そうしたポリツェルからヴィゴツキーが摂取しようとしたものは何であるのか、という問題である。この点について中村は次のように述べる。

1929年のこの時期、文化－歴史的理論の基本枠を作り上げつつ、すでに人間の心理的本性は個人の内的構造へと転回された社会的諸関係の総体であることを明らかにしていたヴィゴツキーは、自然ではなく社会が人間行動の決定因であるという点に、動物とは区別される人間に固有な（つまり、人間に普遍的な）心理学の基本を見たのである。動物の心理学と通分することのできない人間の心理学の確立——ここにヴィゴツキーによる「心理学の人間化」が始まるのである。（中略）

同時に、ヴィゴツキーは、心理学の人間化のこの観点をさらに一步進めて、個人に内面化された社会的諸関係の個人に独自の心理的形態（意識の内容）を明らかにしようと考えた。その発想とそれを展開していく手掛かりを、ポリツェルの心理学の構想から学んだのだと思われる。（中村和夫、1998, pp.196-197）

いいかえれば、上に述べた心理学の対象規定がヴィゴツキーに一つの刺激を与えたことになる。

さらに、中村はヴィゴツキー自身の具体心理学の構想は未成熟に終わったとしながら、ヴィゴツキーの探究が早すぎる死によって中断されずに、また教条主義的な政治状況が出現しな

かったら、その構想は「最終的には、彼の内言理論の中で独自の内容を与えられ再構成されていったのではないか」（中村和夫，1998, p.199）と仮説を提起している。

小論では、中村が切り拓いたそうした地点に立って、ヴィゴツキー理論の遙かなる地平線を眺めることにしたい。

## 2 「フォイエルバッハに関する第6テーゼ」をめぐる

上の中村の引用にも姿を表しているが、ヴィゴツキーの媒介的発達理論と人格発達理論に深くかかわるものとして、小論のエピグラフに示した、マルクスの「フォイエルバッハに関する第6テーゼ」を取り上げねばならない。一般的には後の史的唯物論につながっていくマルクスの最初のひらめきが記されたものと考えられるこの「テーゼ」は、ポリツェル（というよりは彼の後継に位置するセーヴ）にもヴィゴツキーにも大きな影響を与えたのであるが、しかもその影響の受け方は両者では異なっている。つまり、「第6テーゼ」と心理学という興味深いテーマが浮かび上がってくるのである。

まず、ポリツェル―セーヴの流れにおいては、具体心理学は「社会的諸関係の総体」そのものの研究、つまり経済学的研究を経由して心理学に回帰するという戦略がとられている。ポリツェルは『心理学の基礎への批判』公刊の翌年、「心理学は人間の事実の『秘密』をいささかも持っていない。それは、その『秘密』が心理学的次元に存在していないからにはかならない」（Poltzer, G., 1929/1981, p.170）と述べ、それ以降、マルクス経済学の研究に向かったのであるが、セーヴはまさしくこの「秘密」は「社会的諸関係の総体」であると考えたのである（Sève, L., 1969/1981, p.193//1978, p.204）。それは具体心理学の探究の「迂回路」（Sève, L. 1987, p.218）とでも呼ぶべきものであった。

他方、ヴィゴツキーはそれとは違う道を歩んでいる。ポリツェルが《人間の「秘密」は心理学的次元にはない》と述べたのと奇しくも同じ29年に、ヴィゴツキーは次のように記している。

マルクスのパラフレーズ：人間の心理学的本性は、内側に転移されて人格の諸機能と人格の構造の諸形態になった、社会的諸関係の総体である。マルクス：類としての人間について；ここでは、個人について。（Выготский, Л. С., 1929/2003, с. 1023）

ポリツェル―セーヴが具体心理学への「迂回路」を進んだとすれば、ヴィゴツキーの歩もうとした道は「社会的諸関係の総体」の人間の内側への転生（вращивание, ingrowing）、あるいは、「第6テーゼ」の心理学的転倒とでも呼ぶべき道であった。『高次心理機能の発達史』（31年）にも、このテーゼの心理学的転倒を述べた同様の箇所がある。



マルクスの有名な命題を変更して、私たちは次のように言うことができるであろう。すなわち、人間の心理的本性は、内側に転移されて人格の諸機能と人格の構造の諸形態とになった、社会的諸関係の総体を表している。私たちは、マルクスの命題の意義はまさにこのようなものだと言いたいわけではないが、この命題のなかに、文化的発達史が私たちを導くあらゆるものの最も完全な表現を見いだすのである。（Выготский, Л. С., 1931/1983, с. 146//2005, р.183）

ヴィゴツキーのこのフレーズからも明らかであるが、彼は「第6テーゼ」から演繹して心理学理論を構築しようとしたわけではなく、実験や観察を含む発達研究のなかで解明してきた「文化的発達史」（つまり媒介的発達理論）の「最も完全な表現」が心理学的に転倒されたテーゼのなかに見いだされ、彼の理論はテーゼと整合すると述べているのである。

『高次心理機能の発達史』のなかには、「社会的諸関係の総体」の転生、「第6テーゼ」の心理学的転倒を表す他の箇所も含まれている。それは文化的発達史（媒介的発達理論）を定式化した箇所である。

子どもの文化的発達におけるあらゆる機能は、二度、舞台の上に現れ、二つの次元で、最初は社会的次元で、後には心理学的次元で、最初は人々のあいだで心理間カテゴリーとして、後には子どもの内側で心理内カテゴリーとして、現れる。このことは、随意的注意にも、論理的記憶にも、概念形成にも、意志の発達にも、同じように関係している。私たちにはそのような命題を法則とみなす権利があるが、もちろん、外から内への移行は過程そのものを変形し、その構造と機能を変化させている。すべての高次諸機能とそれらの諸関係の背後に、発生的には、人々の社会的諸関係、現実的諸関係が控えている。（Выготский, Л. С., 1931/1983, с. 145//2005, р.182）

ここでいわれる「すべての高次諸機能とそれらの諸関係の背後に、発生的には、人々の社会的諸関係、現実的諸関係が控えている」という事柄もまた、ただ「第6テーゼ」から論理的に導き出されたものではなく、まさしく心理諸機能へと転化される「人々の社会的諸関係、現実的諸関係」が「人間の具体心理学」のなかには数多く例示されている。たとえば、指差しのような指示的身ぶりについては、たんに遠くのものを捕捉しようとする「即自的段階」、それを見ていた母親に子どもが欲求を顕わにし、彼女がそれをことばにしながら取ってあげるという「対他的段階」、本来の指示的身ぶりによって目標物を手に入れる「対自的段階」と分析され、ことばの前駆としてある指示的身ぶり（「対自的段階」）が成立する前には、他者との関係の介在（現実的關係）が位置づけられている。ことばそのものも、内的言語（自分に向けた対自的段階の言語）のまえにはコミュニケーション言語（他者に向けた対他的段階にある言語）が存在している。さらに個別的心理諸機能もまた同じように説明される。二人の口論が一人の子どものなかで行われるかのような熟慮、監督者と執行者が一人の人間のなかで生じるかのような意志的過

程、他者との対話が自己との対話を経由して転化していく思考過程などである。これらは、ピアジェやジャネが示した事例も含めて心理学的問題の本質を一般化するうえで「第6 テーゼ」の心理学的転倒が有効であることを示している。

同時に、ヴィゴツキーはこれらにおいて、個別的心理機能の高次化のみならず、「人格の諸機能」「人格の構造の諸形態」と述べているように、「第6 テーゼ」を契機の一つとして、人格の問題に着目するようになったと考えられる。このテーゼはその意味では、30年代のヴィゴツキー理論の第2の道である人格発達理論の始原にも位置しうるものであるが、「人間の具体心理学」ではそのうち具体的個人の人格をどう捉えるのかという問題が前面に現れている。それは、ヴィゴツキーにとって「ドラマ」の概念があらわす人格の問題である。

### 3 ポリツェルとヴィゴツキーにおける「ドラマ」の概念

すでに述べたように、具体的な個人のドラマはポリツェルにとって心理学の本来の、あるいは、唯一の対象であった。

彼が用いるドラマの概念は、ヤロシェフスキーの述べるところによれば、「マルクス主義の影響のもとに、舞台芸術から経験科学に転移された」(Yaroshevsky, M., 1989, pp.232)ものとされるが、中村も指摘するように、むしろフロイトから学びとられたものであり、またポリツェル自身、「シナリオ」や「俳優」の語を用いてはいるが、この概念から「ロマン主義的な響き」を捨象し、『感動的な』意味を排除し、この概念を「客観的な事実」という意味で使用している(Politzer, G., 1928/2003, p.11//2002, p.55)。したがって、まず念頭に置くべきは、ポリツェルのドラマ概念には、いわゆる（日本語のイメージにつきまといっている）《劇的》とか《ドラマティック》とかの要素が不可欠なものとしては含まれていないことである。

そうしたポリツェルのドラマ概念を特徴づけるとすれば、第1に、ドラマとは具体的個人の具体的生活のなかで経過するもの、あるいは、そうした生活そのものである。彼は次のように述べている。

心理学は、それに存在理由があるとすれば、「経験的」科学としてしか存在することはできない。したがって心理学は、1人称と等質性との要請を、その次元に適合するように解釈しなければならない。**経験的**であるからには、心理学の〔対象とする〕私は**特定の個人**でしかありえない。他方では、この私は統覚のような先験的な行為の主体ではありえない。なぜなら、具体的個人と同じ次元にあり、ただたんに心理学の私の行為である概念が必要だからである。ところで、具体的個人の行為とは**生活**であるが、しかし、それは特定の個人の特定の生活であり、要するに**語のドラマ的意味での生活**である。(Politzer, G., 1928/2003, p.51//2002, p.80)

そうした生活観は、ポリツェルのフロイト理解とかかわってくる。具体的心理学の方向を向

いている限りでのフロイトが明らかにしようとしたのは、「心理学という抽象的個人ではなく個人生活の主体」、しかも「内観の主体ではなくドラマとしての生活の俳優」、つまり「日常生活の私」（Politzer, G., 1928/2003, p.53//2002, p.83）だとされる。したがって、ドラマとは具体的個人の具体的生活であるところの「日常生活の私」の生活ということになる。

第2に、上で述べたように、ドラマ概念は「ロマン主義的な響き」や「感動的な意味」が捨象されていることに直接に関連してくるが、ポリツェルは具体的個人の具体的生活としてのドラマはいささかも「内面的」ではないことを強調している。

そうした強調の背景には、ポリツェルのなかに「内面か外面か」の二者択一の回避、行為の生理心理学的研究と内観的研究の分裂の回避という志向があり、それらの真の総合をドラマ概念のなかに吸収することが意図されているように思われる。ポリツェルが述べている次のようなことば——「主観的心理学と客観的心理学の真の総合」（Politzer, G., 1928/2003, p.247//2002, pp.277）、「私の身ぶりの純粋な生理学的機構に関する考察が心理学的観点の手前にあるのだとすれば、内観的記述はその向こう側にある。心理学者の観点はドラマと完全に一致する。」（Politzer, G., 1928/2003, p.248//2002, pp.277-278）は、そのことを示している。

このような意味で、具体的個人としての私にかかわる内面と外面、主観心理学と客観心理学、内観主義と生理学主義の総合を図るものがドラマだ、ということになる。したがって、内面と外面の総合という側面からすれば、ドラマとは、私の内面とそれにかかわる状況とを総合したもの、つまり主体-客体の総合である<sup>(3)</sup>。

第3に、ドラマは具体的な私の人間としての行動の展開として現れざるをえないが、そうした行動のもつ人間的意味（un sens humain）こそドラマの核心となる（Politzer, G., 1928/2003, p.248-349//2002, pp.278）。まさしくそれが『「ドラマの意味」』（le 《sens du drame》）であり、ドラマが内面的でも空間的でもないのは、ドラマ的要素とは意味（la signification）にほかならないからだとされる（Politzer, G., 1928/2003, p.251//2002, pp.280）。残念ながら、意味とドラマの関係という重要問題は『心理学の基礎への批判』の続編でワトソンの行動主義とゲシュタルト心理学を扱いながら解明したい旨が述べられており（『心理学の基礎への批判』序文）、その解明はこの書物の範囲内では十分に進められていない。ヴィゴツキーとの連関を深めるうえでも重要な論点となるであろう。

以上のようなポリツェルに対してヴィゴツキーのドラマ概念はむしろ内面的なものである。ヴィゴツキーは具体的個人の内面で生じる矛盾や衝突のなかにドラマを捉えている。前号で紹介したように、妻の犯罪を裁かなければならない判事を例にとって、ドラマが分析されている。「人間として私は同情するが、判事としては断罪する」という思考の下僕としての情念と、「私は妻の罪を知っているが、彼女を愛している」という思考の主人としての情念とが衝突するところに、ドラマが発生する。つまり、より一般的にいえば、具体的個人の人格内部にお

いて諸機能の複数のヒエラルヒーが衝突することこそドラマなのであった（Выготский, Л. С., 1929/2003, с. 1032）。先の判事の例でいえば、スピノザ的ヒエラルヒーとフロイト的ヒエラルヒーの衝突がドラマである。そのようなドラマを成立させる一般的な定式は、「諸機能の、恒常的で固定したヒエラルヒーは存在しない」（Выготский, Л. С., 1929/2003, с. 1031）という点にあるであろう。

ところで、ドラマという語はその後、『高次心理機能の発達史』や『心理学に関する講義』のなかで使用されてはいるが、詳しく展開されているわけではない。また、それ以降、ドラマの概念はヴィゴツキーの主な著作のなかには見あたらない。それは、中村が「ポリツェルのアイディアからヒントを得た『人間の具体心理学』の構想は、未成熟のままにとどまった」（中村和夫, 1998, p. 199）と述べる主な根拠であろう。

しかし、筆者の見解では、具体的個人の人格や意識を明らかにしようとする具体心理学の流れは、ドラマという語を使用せずに継続され展開されていると考えられる。その一つは心理システムの概念においてである。これは、「人間の具体心理学」のなかで述べられた《心理諸機能のヒエラルヒーとその非恒常性》をより明確な形で明らかにするものであった。これも大要は前号で述べたので、要点だけを記しておこう。一般的個人でも具体的個人においても、思考、想像、情動のそれぞれの本質は、それ自体としてよりは、それらの関係のなかに位置づけてこそ十全に捉えられる。たとえば、思考を機軸にすれば、次のような三つの思考とそれぞれに異なるヒエラルヒーが得られる（Выготский, Л. С., 1932/1982//1976//2000）。次の図式では、それぞれの項目において左の項目が右の項目を規定している。

- ・現実的思考：思考 —— 想像 —— 情動
- ・自閉的思考：想像 —— 情動 —— 思考
- ・発明的思考：想像 —— 思考 —— 情動

この図式は一般的な人格の意識においても具体的個人の意識においても妥当するものであり、ヴィゴツキーが描いた複数のヒエラルヒーの衝突としてのドラマ概念がより洗練されたものと捉えられるであろう。

ヴィゴツキーの「具体心理学」と関連づけられる、もう一つのものは、心的体験（переживание, ペレジヴァーニエ）の概念である。これについても、アルコール依存症の母親と三人の子どもの事例とともに、前号に紹介しておいた。心的体験の概念は子どもの内側にあるものだけを示すとも、状況の側にあるものだけを示すともいえず、両者を総合した、人格的モメントと環境的モメントの統一体であった（Выготский, Л. С., 1933/1984 с. 382-383//2002, p. 161-162; Выготский, Л. С., 1934/2001, с. 75-76）。これは上述のポリツェルのドラマ概念の一側面である主体-客体の総合にもっとも近い、その類縁的な概念である。

こうして中村が切り拓いた地点の先に見えてくるものは、ドラマ（心理諸機能のヒエラルヒーの非恒常性）—— 心理システム —— 心的体験という地平線へと進む流れであり、ヴィゴツ



キーの具体心理学の構想は「未成熟のままにとどまった」というよりは、むしろドラマの語を使っていなくとも《成熟しつつあった》と捉える方が合理的である、といえるであろう。

#### 4 「具体心理学の抽象的研究」

ヴィゴツキーの「人間の具体心理学」のなかには、「私の文化的発達史の歴史は、具体心理学の抽象的研究である」（Выготский, Л. С., 1929/2003, c. 1031）というフレーズが記されている。筆者には、このフレーズのなかに、「人間の具体心理学」から『高次心理機能の発達史』に流入した部分（媒介的発達理論）とドラマの構想の部分（具体的個人の意識論）との結節点があるように思える<sup>(4)</sup>。

このフレーズをどのように解釈すべきであろうか。筆者には、そこから二重の意味が浮かび上がってくるように思われる。第1は、ポリツェルが具体心理学の対極にあると考えた抽象心理学、メタ心理学、三人称の心理学、あるいは心理学的實在論とのかかわりである。「抽象的研究」という語に力点を置いてこのフレーズの意味を捉えたとすれば、「私の文化的発達史の歴史」つまり媒介的発達理論はそのままではポリツェルのいう抽象心理学に陥り、類としての意識、あるいは一般的人格の意識を課題とすることはあっても、具体的個人の意識に触れるような理論とはならないという意味が浮かびあがってくる。第2に、そうした意味を念頭に置きながら「具体心理学の」に力点を置き、かつそこに方向性を見るとすれば、具体的個人の意識の解明には、ヴィゴツキーがそのときに到達していた媒介的発達理論では不十分だとしても、普遍の次元で発達を捉える「抽象的」理論、変形された媒介的発達理論が必要である、と読み取することもできる。つまり、このフレーズは、具体心理学との関係における媒介的発達理論の否定と肯定をともに含んだものだと考えられる。

以上の二重の意味については筆者の推論であるが、少なくともヴィゴツキーが記したのは「私の文化的発達史の歴史は具体心理学である」ではないことや、中村も指摘するように、具体心理学に関する部分を除いて他の部分は『高次心理機能の発達史』に取り入れられていることを根拠に、そのように推論しておきたい。

上記の第2の解釈について少々補足をしておこう。すでに述べたように、ポリツェルはドラマ（具体的個人である私の具体的生活）こそ心理学の唯一の対象と考えている。それは徹頭徹尾、具体的個人の意識を捉えようとする大胆な宣言ではあるが、ポリツェルが『心理学の基礎への批判』のなかでドラマの分析方法として述べたのは、具体的には「物語の方法」だけであり、それだけでは心理学的方法として不十分であった。過去の心理学諸理論を「心理学的實在論」としてほとんど否定しざるポリツェルの立論には、普遍と特殊、抽象と具体をやや対立的に捉える傾向が潜んでいる。その意味では、具体的個人の意識へのアプローチと両立し、かつそれに貢献しうる「抽象的」理論が必要不可欠となるであろう。

そのようなものとしてある理論を「人間の具体心理学」以降のヴィゴツキーの諸著作のなか

に追跡するとすれば、二つの大きな機軸を発見することができる。その第1は、ヴィゴツキーが『思考と言語』（第5章）で述べたような「普遍から特殊へ」という概念の運動に沿うことになるが、30年の普遍的次元での心理システム論（Выготский, Л. С., 1930/1982）、さらに前号でその骨格を示したような年齢期、構造、心理的新形成物、危機、発達の社会的状況などの諸概念にもとづく人格の普遍的発達理論などの普遍的次元での機軸である。第2のものは、具体的次元での機軸であり、上述したドラマ、心理諸機能のヒエラルヒーの非恒常性、思考・想像・情動の異なる相互関係に示されたような心理システム論、心的体験の概念、さらに内的言語の意味論がそれにあたる。

こうして、第1の普遍的次元での概念が第2の具体的次元の概念を導き、また逆に第2の概念が第1の概念を豊かにすることによって、具体的個人の意識を分析する心理学的方法が構成されていくと考えられるであろう。

以上の点をふまえるとすれば、小論の冒頭に示された30年代におけるヴィゴツキー理論の三つの道の仮説は若干の修正を受けねばならない。その第2の道であった人格発達理論には人格の普遍的発達法則を解明しようとする小径と具体的個人としての人格の意識論を究明しようとする小径とが浮かび上がるが、従来、筆者はこの最初の小径だけを第2の道としていた。そうした修正を加え、かつ、ヴィゴツキー理論に思想的にスポット・ライトで照らす人物を加えたものが、次の図である。図にある数字はそれぞれの道に位置づくヴィゴツキーの主要な著作を発行年または執筆年で示したものである。

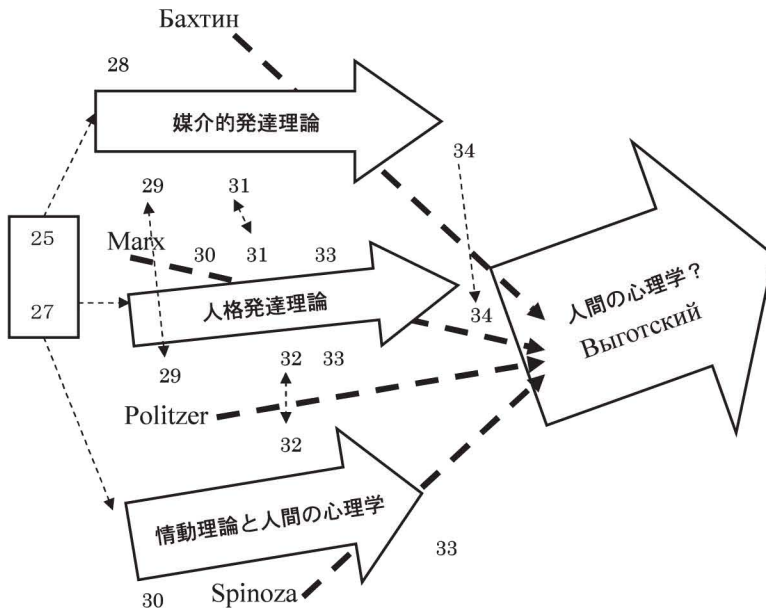


図 ヴィゴツキー理論の発展の3つの道（30年代）

《30年代につながっていく主な著作》25 =『芸術心理学』（邦訳同名），27 =『心理学の危機の歴史的意味』（邦訳『心理学の危機』）

《媒介的発達理論の系譜に位置する著作》28 =「子どもの文化的発達の問題」，29 =「人間の具体心理学」，31 =『高次心理機能の発達史』（邦訳『文化的－歴史的的精神発達の理論』），34 =『思考と言語』（邦訳同名）  
《人格発達論の系譜に位置する著作・人格の普遍的発達法則》30 =「心理システムについて」，31 =『高次心理機能の発達史』（特に最終章，邦訳前出），31 =『少年期の児童学』（邦訳『思春期の心理学』），33 =「年齢の問題」（邦訳『新・児童心理学講義』所収）

《人格発達論の系譜に位置する著作・具体的個人の人格》29 =「人間の具体心理学」，32 =『心理学に関する講義』（邦訳『子どもの心はつくられる』），33 =「7歳の危機」（邦訳『新・児童心理学講義』所収），34 =『児童学原理』（とくに「児童学における環境の問題」）

《情動理論と人間の心理学》30 =「心理・意識・無意識」，32 =『心理学に関する講義』（邦訳前出），33 =『情動に関する学説』（邦訳『情動の理論』）

## 5 具体的個人の意識の単位——内的言語の意味か，心的体験か

ポリツェルは心理学の唯一の対象をドラマとしていることは，すでに述べたとおりである。それは確かに具体的個人の心理学の研究対象を構成するものではあるが，彼の分析方法は心理学的に十全なものではなかった。対象も方法も心理学的であり，かつ具体的個人の意識を分析しうる心理学的概念が要請されるのである。しかも，その心理学的概念は同時に歴史的社会的でなければならない。なぜなら，その概念が対象とするのは抽象的個人ではないからである。「フォイエルバッハに関する第6テーゼ」をめぐって迂回路をとるにせよ，転生と心理学的転倒の路をとるにせよ，具体的個人の意識のなかに存在し，同時に，歴史的社会にも存在するものを発見することが必要なのである。それは，ヴィゴツキーのいうような単位，この場合には具体的個人の意識の単位を見つけ出すことである。

ヴィゴツキーは『思考と言語』のなかで，言語的思考の単位は語の意義〔語義〕（значение, ズナチェーニエ）であり，人間の意識（言語的思考はその一部である）の単位は語（ことに内的言語）の意味（смысл, スミスル）であり，しかも後者が前者を内包していることを明示している。語の意義〔語義〕は歴史的社会にも一般的個人，具体的個人にも存在しており，しかも具体的個人の意識のなかでは意味によって導かれている。したがって，意味は直接的には具体的個人の意識のなかに存在しているが，意義〔語義〕を介して歴史的社会にも連結している。そのような意味は，歴史的社会のなかで生きる具体的個人の意識を考察する単位たりうるものである。中村がヴィゴツキーの具体心理学の構想は意味によって再編成されるであろうと推測したのは，このような点を考慮してのことであろう。

しかし同時に，ヴィゴツキーの「7歳の危機」（Выготский, Л. С., 1933/1984//2002）には，具体的個人の意識の単位は心的体験であると明瞭に述べられている。念のために，該当箇所を

示しておこう。

（ことばと思考の統一体の単位は意義〔語義〕であることが触れられたあと、次のように述べられている。）人格と環境とを研究するためにも単位を指定しうるのである。その単位は病理心理学と心理学のなかで心的体験と名づけられてきた。心的体験は、それが表しているのは子どもへの環境の影響である、あるいは、子ども自身の特質であるとはいえないようなもっとも単純な単位である。つまり、心的体験は、発達のなかで捉えれば、人格と環境との単位なのである。それ故に、発達のには、環境的モメントと人格的モメントの統一は子どもの一連の心的体験のなかに実現されている。心的体験は現実のあれこれのモメントに対する人間としての子どもの内的関係と捉えられるべきものである。どの心的体験もたえず何ものかの心的体験である。何ものかの意識の働きではないような意識の働きが存在しないのと同じように、何ものかの心的体験ではないような心的体験も存在しない。だが、どの心的体験も**私の心的体験である。心的体験は意識の単位として**、つまり、注意や思考のなかでは意識の諸連関が与えられていないのに対して、**意識の基本的性質がそれ自体として与えられている単位として**、現代の理論のなかに導入されている。（Выготский, Л. С., 1933/1984, 382–383//2002, p. 161–162. 強調＝引用者）

ここで「どの心的体験も私の心的体験である」と述べられているように、心的体験が「意識の単位」とされる場合の意識とは、一般的、普遍的な意識であるよりは、具体的個人の意識を指している。

このように、ヴィゴツキーは、具体的個人の意識の単位について、一方では心的体験を単位とするとともに、他方では内的言語の意味を単位としていることは、明らかであろう。彼は残念ながら両者の関係を明示的には示していないのであるが、それをどう理解するのかは、具体的個人の具体的生活や意識を把握するうえで決定的に重要となるものである。

ここで意識の単位に関連して、ひとつの検討材料を提供することにしよう。それは、イエ・ユ・ザヴェルシネヴァ「エリ・エス・ヴィゴツキーの学術史の時期区分の問題によせて」（Завершнева, Е. Ю., 2006）という論考であり、ヴィゴツキーの手稿などの未公開資料が駆使されている点で興味深いものである。この女史が伝えている未発表資料の内容やそれにもとづく女史自身の立論のうち、意識の単位に関連するものを筆者の意見を添えながら抜き出すことにする。

（１）ヴィゴツキーの未公開資料のなかには未執筆に終わった諸著作のプラン（いちばん早い日付は32年）が見つかっており、そのプランのなかには、『意識の問題』というタイトルがつけられたものが含まれ、内容的には『思考と言語』がその序論に位置している（Завершнева, Е. Ю., 2006, c. 285）。（残念ながら『意識の問題』の目次または概要は女史の論考では示されていない）



（2）『意識の問題』にいたる経緯を女史は次のように立論している—「思考はたんに記憶や注意と並ぶ諸機能のひとつなのではなく、ヴィゴツキーの考えによれば、『人間に固有な特質』に関するもっとも主要な問題が思考と連結している。そのような特徴を十全にはもたらししていない諸機能——記憶、注意——は、文化—歴史理論の枠内で素早く獲得された。思考は硬いクルミのようであり、すでに1928年に始められた実験が研究プログラムの新しい前進をもたらした。その実験は、思考が他の『諸機能』——情動とことば——と密接かつ独特に結びついていることを示した。三つの未知なるものの均衡を仮定するならば、意識理論の構築を意味することになるであろう。もっぱら『思考—ことば』の連関の路線に沿った第1の解答となったのは、ヴィゴツキーの最後の著作『『思考と言語』＝引用者］である。だがヴィゴツキーは他の諸連関をも研究した。とりわけ、未完の労作『情動に関する学説』は同じ問題への解答のもうひとつの部分であり、感情と知能の総合という単位〔心的体験を指していると思われる＝引用者］が発生している年齢期心理学の領域における諸著作が、全体的構図のさらにひとつの構成部分である」（Там же, с. 289）。(女史はこのように、思考研究の深化が3つの経路を通して意識の理論に達すると立論している。3つの経路は上で述べた筆者の仮説と似ているが、筆者の場合は「人間の心理学」に達するという点、心身問題を位置づけている点で、女史の立論とは違っている)

（3）未発表の「メモ帳」（32年）によれば、ヴィゴツキーは、意義〔語義〕の背後には、意識を分析するためのより重要な単位である意味が控えている、と指摘している（Там же, с. 290）。(メモ帳の内容にもよるが、意識の単位としての意味論が初めて展開されたのは『思考と言語』最終章が書かれた34年ではなく、32年ということになる)

（4）女史の推察によれば、未発表資料、スピノザの著作の余白への書き込みから、ヴィゴツキーは『情動に関する学説』の第1部の批判的部分につづいて、第2部に取りかかろうとしたと判断できるが、すでに内容的なプランができていたとは判断できない（Там же, с. 290）。(女史の論考のなかでは、「知能と情動」の関係への言及はあるものの、心身問題は位置づけられていないが、それは『情動に関する学説』第2部が書かれなかったことについて女史が述べるような経緯に関連しているかもしれない。しかし、ヴィゴツキーがスピノザを摂取しながら「知能と情動」の関係を述べるだけであればスピノザの最初の論文『神、人間および人間の幸福に関する短論文』第2部だけで十分となる。最後の著作『エチカ』は、感情を思考の様態として捉えるとともに、感情は人間身体の変状およびその観念であるという命題をも提起しており、ここに身体的モメントが認識にも感情にも位置づけられてくる。感情論における『短論文』と『エチカ』の違いはここにあり、ヴィゴツキーが『エチカ』から心理学的問題を摂取しようとしなかったとは考えにくいので、当然ながら心身問題も重きをなしてくるであろう)

（5）意義〔語義〕、意味、心的体験の関連について女史はヤロシェフスキーを批判しつつ、次のように立論している—「新しい理論のなかに発生した矛盾は、ヴィゴツキーが二つの分析単位——意義〔語義〕と心的体験——のあいだで揺れていたことに起因していたし、晩年にヴィゴツキーは心的体験の側にますます傾き、年齢期心理学に関する諸著作のなかで心的

体験を選択したとはいえ、それらは並存していたと、エム・ゲ・ヤロシェフスキーは書いている。私たちの見解では、そうした観点はまったく正しくない。ヴィゴツキーが『思考と言語』のなかで書いたように、それぞれの具体的事例のなかにその単位が見いだされるべきであり、あるひとつの——たとえそれがきわめて重要なものであるとして——機能間の連関を分析するための単位たりうるのは意義（と意味）であるのに対して、子どもの発達に関する研究においては、より高次の次元の単位、ヴィゴツキーが『心的体験』と呼んだ統合的生成物が生じるのである。」（Там же, с. 292-293）

ところで、問題は、意味と心的体験の関係をどのように捉えるかということであった。上記（5）の立論では、ヤロシェフスキーがどこで書いたことが明記されていないので、彼の論述の真意は確かめていないが、もし女史が書いているとおりであるとすれば、「揺れ」ているのはヤロシェフスキーだとしななければならないであろう<sup>(5)</sup>。女史たちの「見解」の方が実証的であろうと思われる。しかし、「意義〔語義〕（と意味）」と「心的体験」との比較というのは、少々判りにくさが残る。

「子どもの発達に関する研究においては」と述べられていることから推察されることには、発達的に見れば、意味の一部としての意義〔語義〕や後者に対する前者の優越性という関係は内的言語の成立以降の関係であり、心的体験は内的言語の成立以前から存在するという点で、心的体験を意識の単位と捉えることは有利であろう。しかし、問題をさらに煮詰めれば、発達的に内的言語が成立したあと、意識の単位としての意味は、同じく意識の単位としての心的体験と同じものと捉えられるのか、それとも両者には相違があって何らかの関係性を前提とすべきなのか、という問題は未解決である。上述の女史の立論は明らかに前者ではないが、さりとて関係性が明確に述べられているわけでもない。

そこで、意味と心的体験の関係性をどう捉えるかという問題について、筆者は仮説的に次のように考えたい。

言語との連関で見れば心的体験と意味（内的言語の）は同じものであるが、環境と具体的個人としての人格との関係という連関からみれば、心的体験は主体－客体の総合であり、心身の関係という関連からすれば心的体験は心身の総合（前号で述べた飲酒癖のある母親と三人の子どもの事例をとりあげれば、いちばん幼い子どもに現れた夜尿、吃音、声の喪失という身体的モメントはその子の意識を把握する不可欠の手がかりとなるであろう）であると考えられる。もちろん、これら三つの連関は孤立的にバラバラにあるのではないが、すべてを意味に帰着させてしまうと心的体験を分析するときに具体性が失われてしまう危険性が生じるであろう。

こうして、先に述べた筆者の仮説（30年代のヴィゴツキー理論の三つの道と、それらが合流する大通りの不在）は、具体的個人の意識の単位を探究するうえでも手掛かりを提供してくれるのである。ヴィゴツキーが提起した諸概念、一方で的人格発達の普遍的法則性と、他方でのドラマ、

心理諸機能のヒエラルヒーの非恒常性、心理システム、心的体験、内的言語の意味との配置のなかで、とくに最後の二者は具体的個人の内側にも歴史的社会的なかにも存在する（そのままの形態ではないが）ものとして、人格発達理論の新しい可能性を切り拓くものである。それは、ある意味では、「フォイエールバッハに関する第6テーゼ」のヴィゴツキー的展開と特徴づけられてよいものであろう。

〔注〕

- （1）中村が挙げているロシアとアメリカの研究は、ミハイル・ヤロシェフスキーの『レフ・ヴィゴツキー』（Yaroshevsky, M., 1989）、同『レフ・ヴィゴツキー：新しい心理学の探究』（サンクト＝ペテルブルグ、1993年）、アメデオ・ジョルジ「ジョルジュ・ポリツェルの心理学」（『心理学の基礎への批判』モリス・アブレイ訳、Duquesne 大学、1994年の序文）である。たとえば、ヤロシェフスキーは次のように述べている。— “The concept of drama, transferred by Politzer, under the influence of Marxism, from the art of the theatre to empirical science, was tested in the psychology of personality..., in historical psychology..., in social psychology..., and in the analysis of the neuro-mechanisms of the self-regulation of behaviour.” (Yaroshevsky, M., 1989, pp. 232–233)
- （2）したがって、『心理学の基礎への批判』の思想的基盤は未確立であったとしなければならない。ポリツェルの同時代人であるルフェーブルは次のように述べている。— 「この書は心理学的方法と理論を批判しながら構築部分——具象心理学——を準備しようとしたものだった。そこでは実験心理学がもっとも激しく攻撃されている。具象心理学については、行動主義、ゲシュタルト心理学、精神分析および意識記述を折衷したものでかなりあいまいに合成したものである。雑多な混濁なのである。」（寺内礼、2002, pp. 322–323 より引用）
- （3）もしヤロシェフスキーのいうように、ドラマの概念が「舞台芸術から経験科学に」転移されたものということが正しいとすれば、比喩的には、近松門左衛門の「虚実皮膜論」の皮膜こそ、ポリツェルのいうドラマに近い。人形浄瑠璃と歌舞伎（演劇）において虚構と現実のあいだにある一枚の皮膜こそ芸術であるとすれば、私の内面とそれを取りまく外的世界のあいだにある一枚の皮膜はポリツェルのいうドラマである。
- （4）筆者は以前、このフレーズの後半にある二語、абстрактная разработка〔アブストラクトナヤ・ラズラポートカ、抽象的研究〕を「抽象的加工」と訳していた。2005年8月、中村は筆者に「抽象的準備作業」と訳すのが自分の解釈である旨を述べられた。つまり、文化－歴史理論を限定的に（小論という媒介的発達理論として）捉えようとする筆者と、ヴィゴツキー理論の全体を文化－歴史理論の発展と捉える中村との、それぞれの方向性の違いを反映した二つの訳語であった。この指摘を考えつづけるなかで、筆者は方向性をあまり規定しない包括的な訳語として「抽象的研究」を使うことを思いついた。とりあえずは多義的な理解を許容した方がよいと考えたからである。記して感謝したい。
- （5）ザヴェルシネヴァが指摘するヤロシェフスキーのことばは、彼の『レフ・ヴィゴツキー』英語版（Yaroshevsky, M., 1989）のなかには見つからなかった。ただし、この書物では心的体験と語の意味との関係が次のように規定されている。— These experiences were embodied in the sense of the word. (Yaroshevsky, M., 1989, p. 316)

〔引用文献〕

- 神谷栄司 (2006): 訳者あとがき, ヴィゴツキー『情動の理論—心身をめぐるデカルト, スピノザとの対話』神谷栄司・土井捷三・伊藤美和子・竹内伸宜・西本有逸訳, 三学出版, 2006年7月31日, pp. 374-387
- 神谷栄司 (2007 a): ヴィゴツキー理論の発展とその時期区分について (Ⅲ), 『社会福祉学部論集』第3号, 佛教大学社会福祉学部, 2007年3月1日, pp. 39-58
- 神谷栄司 (2007 b): 中村和夫先生への書簡, 『心理科学』第20巻第1号, 心理科学研究会, 2007年3月28日, pp. 72-79
- 神谷栄司 (2007 c): 保育のためのヴィゴツキー理論——新しいアプローチの試み, 三学出版, 2007年10月刊行予定
- 中村和夫 (1998): ヴィゴツキーの発達論——文化—歴史的理論の形成と展開, 東京大学出版会, 1998年1月18日, 270 pp.
- Politzer, G. (1928/2003//2002), *Critique des fondements de la psychologie*, 1928/ibid, Quadriga, 2003//『精神分析の終焉』寺内礼監修, 富田正二訳, 三和書籍, 2002年〔心理学の基礎への批判〕
- Politzer, G. (1929/1981), *Où va la psychologie concrète?* [具体心理学はどこへ行くのか] 1929/ Les fondements de la psychologie, Edition Sociales, 1981
- Sève, L. (1969/1981//1978), *Marxisme et théorie de la personnalité*, 1969/ibid, 5-ère édition, Edition Sociales, 1981//『マルクス主義と人格の理論』大津真作訳, 法政大学出版局, 1978年
- Sève, L. (1987), *La personnalité en gestation*, Je: Sur l'individualité, Edition Sociales, 1987 [懐胎期の人格]
- 寺内礼 (2002): ジョルジュ・ポリツェル——人と作品——, ジョルジュ・ポリツェル『精神分析の終焉』寺内礼監修, 富田正二訳, 三和書籍, 2002年6月17日に所収, pp. 295-346
- Выготский, Л. С. (1929/2003), *Конкретная психология человека*, [人間の具体心理学] 1929/в кн.: Психология развития человека, М., Смысл-Эксмо, 2003
- Выготский, Л. С. (1930/1982), *О психологических системах*, [心理システムについて] 1930/в кн.: Собрание сочинений, т. 1, М., Педагогика, 1982
- Выготский, Л. С. (1931/1983//2005), *История развития высших психических функций*, 1931/в кн.: Собрание сочинений, т. 3, М., Педагогика, 1983//『文化的—歴史的な精神発達の理論』柴田義松監訳, 学文社, 2005年〔高次心理機能の発達史〕
- Выготский, Л. С. (1932/1982//1976//2000), *Воображение и его развитие в детском возрасте*, 1933/в кн.: Собрание сочинений, т. 2, М., Педагогика, 1982//『児童心理学講義』柴田義松, 森岡修一訳, 明治図書, 1976年所収//『子どもの心はつくられる』菅田洋一郎監訳, 広瀬信雄訳, 新読書社, 2000年所収〔子ども期における想像とその発達〕
- Выготский, Л. С. (1933/1984//2002), *Кризис семи лет*, Л. С. Выготский Собрание сочинений, т. 4, М., Педагогика, 1984//ヴィゴツキー, 新・児童心理学講義, 柴田義松, 宮坂瑠子, 土井捷三, 神谷栄司訳, 新読書社, 2002年, 152-166ページ〔7歳の危機〕
- Выготский, Л. С. (1934/2001), *Проблема среды в педологии*, Лекции по педологии, Ижевск, Удмуртский университет, 2001, с. 70-91 [児童学における環境の問題]
- Выготский, Л. С. (1934/1982//2001), *Мышление и речь*, в кн.: Л. С. Выготский собрание сочинений, т. 4, М., Педагогика, 1984//ヴィゴツキー『思考と言語』柴田義松訳, 新読書社, 2001年9月21日



Yaroshevsky, M. (1989), *Lev Vygotsky*, M., Progress, 1989

Завершнева, Е. Ю. (2006), *К вопросу о периодизации научной биографии Л.С. Выготского*, в журн.: Вестник, номер 1, Российский государственный гуманитарный университет, 2006, с. 284–293 [エリ・エス・ヴィゴツキーの学術史の時期区分の問題によせて]

(かみや えいじ 社会福祉学科)

2007年10月17日受理